

* 答はすべて解答用紙に書きなさい。

* 句読点・記号も字数に数えます。

* 本文は出題の都合上、一部変更しています。

次の文章を読み、後の問に答えなさい。

陸上部の榊井・設楽・俊介に、「ヤンキー」で金髪の大田・バスケット部のジロー・吹奏楽部の渡部の助っ人三名を加えた寄せ集めの六名と顧問の上原先生とで、中学校駅伝ブロック大会に挑むことになった。この場面は3区を走るジローの語りとなっている。

一位の走者が見えて、中継所がわいた。予想どおり、加瀬南中が入ってきた。「大会区間新記録」という声が聞こえる。かなりのハイペースだ。この後、幾多中、加瀬中あたりが続いてくるだろう。そして、大田を含めいくつかの学校が①イツシヨになって集団で入ってくるはずだ。

ところが、二位の選手はa 見えてこない。2区でこれだけの差が開くとは、加瀬南の強さは評判以上だ。一位と二位がいていいるとなると、大田がいるであろう五位六位ラインはどうなっているだろう。前の走者と離れていると走りにくいな。そう思っていると、1 とうでもないものが見えた。いや、b そんなはずはない。俺はもう一度目を凝らして見た。遠くに見えるのは大田だ。大田が叫びながら、いやほえながら走ってくる。

「ジロー、ジロー」大田は必死のイ形相で向かってきた。②ハナミズも涙も出ている。

「ここまでこまで、ラスト！」俺も叫んだ。「ジロー、頼んだ！」大田の叫びのような願いのような声は、襷を通しでずしりと響いた。

「おつす」俺はしっかりと襷を受け取った。のん気にはしてられない。すぐ後ろには三人の走者が来ている。俺は勢いよく踏み出した。

「おお、ジローやつぱり来てくれると思った！」

担任の小野田に駅伝への参加を頼みこまれた次の日、母親に起こされ半分眠った頭で学校に向かうと、榊井に大げさに抱きつかれた。

「ジローが来てよかった」

同じクラスでもないし、c 仲がいいわけでもないのに、設楽も顔をほころばせてくれた。なんともいい感じじゃないか。喜んでもらえるとうれしくなる。何でも引き受けたら、こういう③トクテンがちゃんとある。そんなに走るの嫌いなわけでもないんだし、まあいいか。俺は早速いい気分になった。自分ながら単純なやつだ。しかし、そろい始めたメンバーを見て、ぎよつとした。ヤンキーの大田がいるのはまだいい。あの渡部がいるのだ。吹奏楽部の渡部が駅伝に参加するなんて、思ってもいなかった。なんでも受け入れる俺が、2 唯一苦手とする人物。それが渡部だ。渡部とは今まで何度か対戦する機会があつて、俺はいつも負けてきた。

最初にぶつかったのは五月の合唱祭だ。B 案の定、合唱祭では指揮者をやりたいやつが見つからず、俺に回ってきた。三年連続の指揮者だ。「いいよ、任しておけ」俺がいつもどおりd OKして、④ハクシユが起きたところに反対意見が出た。みんなの嫌がることを引き受けて反対される。初めての事態に俺はおろおろした。この反対したのが渡部だ。「どうして指揮者がジローなの？ ジロー音楽的才能ないじゃん」

渡部がそう発言するのに、みんなは嫌な顔をした。そりやそうだ。やたらにかしこぶってる渡部は嫌われていたし、指揮者を引き受けた俺にみんな感謝しているのだ。

「じゃあ、お前やれよ」俺がむつとするのに、渡部は、「だめだよ、俺は歌がうまいから。俺が指揮になつて、合唱から抜けるのはウ痛い」と、偉そうに言つてのけた。当然ながら、3 みんなから非難の声があがった。だけど、渡部は気にすることもなく、「中学校最後の合唱祭なんだ。勝ちに行くんだろ？」と冷静にみんなに訴えた。

毎年三年生は、中学校最後の合唱祭におおいに盛り上がる。必ず最優秀賞をとりたいたいみんなが必死になるのだ。

「去年、ジローのクラス、ジローの指揮で負けてたじゃん。歌はそう悪くなかったのにな。合唱の審査には、指揮との一体感も入るんだぜ。指揮と歌がばらばらだったらどんなに上手に歌ったって勝てるわけがない」渡部の分析にみんなが「なるほど」とうなずき始めた。合唱に関して吹奏楽部の渡部に軍配が上がつてしまふ。女子たちが「勝ちたい！」「絶対最優秀賞⑤ホしい」と目をキラキラさせ、そのうちみんながそうだなと賛成しだし、そのあとは渡部の独壇場（ひとり舞台）だった。渡部に指名されたあかねちゃんが指揮をすることになり、俺はさすがと指揮者の座を渡すことになった。

そんなこんなで、俺はいつも渡部には負けている。でも、そんなことはどうってことはない。人に負けることなんてC 日常茶飯事だし、負けることがだめじゃないことぐらい中学生の俺は知っている。

俺が気になるのは、渡部が俺のことを嫌っているということだ。渡部はいつだって俺に不愉快な態度を向け、何かと文句を言つた。俺は今までそんなふうになんか嫌われたことはなかった。それに、俺自身嫌いな

やつもない。だから、渡部の態度に落ち着かなくなるのだ。

*

いよいよ駅伝大会が明日に迫り、本番を控えて、学校では壮行会が行われた。部長である榊井が大会への意気込みを語り、校長や生徒代表からのありがたい言葉が送られた。去年は応援する側だったのに、今はみんなの前に立っている。俺は4 身体がきゅんと引き締まるのを感じた。明日は最高の走りを期待している。みんなでも応援している。君たちは我が中学の誇りだ。そういう言葉は俺をエ奮わせた。責任の重さに最初は断つたけど、引き受けてよかった。期待されるのは悪いことじゃない。そんなことを考えていると、突然大田が動きはじめた。大田の足は出口に向かっている。まだ壮行会は終わっていないというのに、どうしたっていうんだ。

「大田、まだだつて」榊井が声をかけると「うるせえ」と大田がどなった。いったいなんなんだ。何が起こっているんだ。ただ静かに壮行会が行われてただけで、大田がキレるようなことは何もないはずだ。それなのに、大田はどんどん熱くなつて、声を張り上げている。榊井がなだめるのも小野田が止めるのも振り切つて、でかい声で叫んでいる。

俺はわけがわからず目の前の状況を眺めていた。しかし、「くだらねえ」「やつてられねえ」「もう走んねえ」そういう大田の言葉が耳に届くたび、俺の中でも5 何かが沸騰しはじめた。ちよつと待てよ。一番走りが遅くて能力のない俺が、それを承知で走ろうとしているのに、大田が何を言っているのだ。どうして走りたくないなどと主張しているのだ。だいたい今つてそういうわがままが言える場か？ 大田だからって、なんでも通るわけじゃない。

「どうでもいいけど、いい加減にしろよ」気づいたら、俺はそう言っていた。「は？」「今さらやめたとか、ふざけたことぬかすなつて」

「なんだ、お前？」大田は俺のほうへ身体向きを変えた。目が血走つて赤くなっている。だけど、不思議なことに、近づいてくる大田を怖いとは思わなかった。勝手なことを思いつくままに叫んでいるやつにしか見えなかった。

「お前、何か俺に文句あんのか？」大田は当然のことを聞いた。

「当たり前だ。大田がいい加減なことすると、俺らにも迷惑だ」

「てめえ、何様なんだ」大田は俺の胸倉をつかんだ。大きなケンカなどしたことない俺は、胸倉をつかまれたことなど二度もない。それなのに、痛くもかゆくもなかった。どうして今こんなこと言うんだ。明日にはみんなまで走らなくてはいけないのだ。頭にあるのはそれだけだった。

「ここまできてぎやあぎやあ言うな。明日なんだぜ。⑥ハラくくつてやれよ」

今になって駅伝に出ないなんて、ふざけている。そんなことになつたらすべてが台無しだ。俺は大田を正面から見すえた。大田は目を細めて俺の表情をうかがつていたかと思うと、「やつてられねえ！」と吐き捨てて、体育館から走り去つた。間違つてはないはずだ。当然のことを言つただけだ。けれど、大田が出て行つた後、俺の前に6 冷えた空気があるのを感じずにはいられなかった。

壮行会が終わると、俺たち駅伝メンバーはそのまま体育館の隅に集まつた。

「みんなの前であんなふうと言つたら、大田オ先輩も出て行くしかなかったよな」俊介がぼそりと言ひ、上原も「大田君変にプライド高いからね」と言つた。

ちよつと待て。俺のせいなのか。俺のせいで大田が出て行つたのか？「せつかく大田ここまでがんばつたのにな」心配そうによつてきた小野田も、口をはさんだ。

「ジローの言うとおりでと思うけど、今大事なことは、大会に出ることだろう？ 大田にへそを曲げられたらどうしようもない」

榊井も苦々しい顔をした。榊井にまでそんなこと言われるなんて、俺はくらくらした。あの大田ががんばつて走ろうとしているのに、ちよつとぐれたぐらいで責めることはないだろう。どうして大田のがんばりをつぶすんだ。それがみんなの意見なのだ。

授業をふけて、⑦キンクなんて守ろうともしない。そんなことがおおっぴらに通つて、そういうやつらが少しまじめにやればほめられる。それが中学校ルール。なんでもOKな俺は黙つてやることをやればいい。そういうことか。さすがの俺も投げ出したくなつた。思わず乱暴な言葉が口から出そうになつた。その時だ。

「お前ら馬鹿じゃね？」冷ややかな渡部の声が響いた。「本当馬鹿すぎて吐き気がする。ジローが100パーセント正しいだろ？」なんでそれに意見するわけ？ ここのこだよ。中学校だろ？ 強いやつのカ機嫌とること大事なのかよ」

渡部がいら立ちながら言うのに、みんな黙つたままだつた。7 誰も視線を合わせることもしない。息苦しくて、体育館の中は窒息しそうだ。

「そうだね。そうだよ、渡部君の言うとおり。それよりさ、練習しようよ。ほら、今日は1000を一本走つて終わりなんだし。大会は明日だよ明日」上原は空気を变えようとばちばち手をたたきながら、陽気に言つた。だけど、心が揺れまくっている俺らには、そんな言葉は8 表面を滑つていくだけだった。

「今できることしよう。ここどうじうじしてても何もならないし」上原が景気よく言つて、「そうだそうだ。ほら、いつまでも体育館にいるな。片付かないしな」と小野田もおどけてみせた。けれど、重い空気は変わらなかった。

たぶん最悪の事態でこういうのだ。どかんと穴に落ちてしまったのに、すぐそこに本番がやってきている。俺たちが解決できようができてまいが、明日には大会がやってくる。その事実だけは変わらない。

「あ、あの、大田君は来るよ」黙って立ち尽くしているみんなに、設楽が消えそうな声で言つた。

「あいつにそんな責任感なんかねえよ」渡部は設楽の言葉をはねのけた。残念ながらみんな同じように思つてゐるのだから。誰も反論しなかった。

「そうじゃないよ。大田君、走るの好きだから」設楽は顔を上げて、俺らの目を見てそう言つた。

柊井がなんとか取り戻そうとみんなに声をかけ、上原がむやみやたらに励まして、俺たちはどうにか1000を一本走つた。大きな不安があるのに、全員でそれに気づかないふりをして明日の最終確認をしようと、みんな何も言わず静かに解散した。

「なんか、ありがとな」校門を出たところで、俺は渡部に声をかけた。

「何が？」「かばつてくれたじゃん」

「どうでもいいことだ」渡部はかばんをかつぎなおすと、足を進めた。

「渡部が俺の味方みたいな発言するなんて、^⑧オドロいたけどな」

「そうか？」「そうかって、お前俺を目の敵にしてるだろ？」

「こいつ、とぼけてるんだらうか。俺は渡部の今までの俺に対するひどい言動をあげた。」

「そーいや、そーだな」

「いつもなんでここまで言われなきゃいけないんだって思つてたんだぜ」

「10 俺さ、ジロー見てるといらいらするんだ」渡部はちゆうちよなく言つた。なんてストレートな告白なんだ。嫌われてるのは百も承知だけど、はつきり言い過ぎだ。

「俺、何か気にキ障ることしたっけ？」俺はおずおずと尋ねた。

「いや、そうじゃないけど。なんていうかさ、ジローいつでもなんでも引き受けるだろう」「まあ、それが俺の癖だからな」

「人数合わせにやつかない仕事。そういうのに、ジローが便利に使われるたび、いらいらしてた」

「だったら、渡部はほぼ毎日いらついていたにちがいない。意外なことて人をいらだたせるものだ。」

「俺お調子もんだからな」俺は頭をかいた。

「まあな。だけど、それをいいことに周りのやつらはなんでもジローばかりにやらせてさ。ジロー、人の何倍もク面倒なこととして、損してるって、頭に來てた」

「なんだそれ？心配してくれてるってことか？」俺が聞くと、渡部はため息をついた。

「でも、お前、全然損なんかしてないんだよな」「ああ、まあ」

「大丈夫だよ、ジロー」渡部は足を止めた。

「明日、大田が来て来なくてもさ」「来て来なくても？」

大田が来なけりや駅伝は成立しない。どこがどう大丈夫なんだと俺が首をかしげるのに、「どつちにしても、ジローは正しい」渡部はきつぱりそう言つた。

渡部に正しいと言つてもらえた。それで十分だった。俺のプライドなんていくらでも折り曲げられる。そもそもプライドなんて中学生には必要ないし、いくらでも曲げ伸ばしできてこそ本場のプライドつものだ。俺は渡部を見送ると、また学校まで走つて戻つた。

「先生、ちよつと」職員室の入り口で手招きをして呼びよせると、

「あれ、ジローまだ帰つてなかったの？」と、げげんな顔をしながらも上原は来てくれた。

「まあな。それよりさ、今日、家庭訪問行くだろ？」「え？どこに？」「どこにつて、大田の家」「そんなの、担任の先生が行くんじやないの」

上原の言葉に、俺はずっこけそうになった。

「いやいやいや、行くだろ。駅伝のことで、帰つたところあるじゃん」

「そっか、じゃあ、行こうかな」「そう。当たり前だ」

「だけど、会いに行つたら、ますます大田君意地になりそうだしな」

「でも、行かないと絶対来ないって。あいつみんなに声かけられるの待つてるところあるだろ？」

「確かに。大田君かまつてほしいオーラ出しまくつてるもんね。よし、じゃあ、行くよ」

みんなと同じように、俺だつてわかつてる。大田が自分で築き上げてきた鎧をどんな思いで外していたかを。居場所のなさに戸惑つて、どんな顔をしたらいいのかわからないまま俺たちの輪に入つていたことも、照れくささやばつの悪さを押し殺しながら練習していたことも。そして、それ以上にこの駅伝をよりどころにしていたことを。だから、ちゃんと

大田に走らせてやりたい。俺だつて大田とイッショに走りたい。

⑨ヨクアサ、集合時間の五分前に、大田はやつて來た。

予想どおりだ。大田は、来るなら 11 今まで自分を包んでいたものを捨てきつて来る。それができないなら来られない。そのどちらかだと思つていた。大田は俺たちのほうを見ようとせず、ただまぶしように目を細めている。どんな顔をしていいのか、わからないのだ。

「おつす、大田」俺はかぶつていた帽子を取つて、大田と同じようにきれいにそつた頭を見せた。

大田から受け取つた襷は重かつた。この一瞬に俺たち以上のものをかかけているのだ。いい加減なことばかりやつてきた大田にとつて、¹²この駅伝の持つ意味は大きい。駅伝にかかわつていた時間は、大田にとつて唯一中学生でいられた時間だつたにちがいない。いや、まだこの時間は続く。上の大会に進んで、あと少し大田にこういう思いをさせてやりたい。

そう意気こんではみたけど、駆け出して500メートルも行かないうちに、俺は後ろにいた三人に抜かれた。記録会でも俺よりずっと速かつたやつらだ。こいつらと同じように走つては、最後までもたない。俺は軽く腕を揺らして、はやる気持ちを抑えた。

3区はなだらかなコースだから、勝負をかけてくる学校も多い。だけど、ペースを崩すな。柊井がスタート前に言つたことを思い出して、俺は一步一步足を進めた。俺を抜いたやつらははずいぶん前に進んでいるけど、これでもいいのだ。今の俺は自分のペースがわかっている。ど素人だつたころの俺とは違うんだ。焦つて台無しにするな。大事に走らなくてはいい。これは記録会でも試走でもなく、本番なのだ。

1キロ地点を俺は試走より一割ほど速いペースで通過した。いいペースで走っているはずだ。しかし、1キロ通過直後のゆるいカーブで後ろにいた集団にとらえられた。そして、カーブを曲がり切り体勢を立て直そうとしたところで、あつてなくその集団に抜き去られてしまった。いくらなんでも抜かれすぎだ。俺は何とか取り戻そうと、ピッチを上げた。けれど、いくら加速しても追いつかない。どこの学校だつて必死なのだ。前との距離は、俺の走力でどうにかできる範囲を超えている。俺は焦りと不安で心臓が速くなるのを止められなかった。こんなの謝つたつてすまないよな。みんなが懸命に練習していた姿を思うと、¹⁰ナきたくなつた。設楽や大田がつないでできたものを俺が崩してしまふ。二人とも試走以上のいい走りをしたのに、俺がそれを無駄にしてしまふ。そう思うと、逃げたくなつた。だから、ほいほい引き受けるんじゃないかなつたんだ。

「この空らんには、五つの会話文が入ります。」

他に俺に駅伝を頼む理由などあるだろうか。俺は柊井の顔を見つめた。「うーん、ジロー楽しいし、明るいし。ほら、ジローがいるとみんな盛り上がるだろ」「そんなの走ることに何も関係ないじゃん」

「そうだな。でも、うまく言えないけど、やつぱりジローはジローだから」

いつも¹³的確に答える柊井が困っている。でも、柊井の言いたいことはわかつた。

高校に大学にその先の世界。進んで行けばいくほど、俺は俺の力に合つた場所におさまつてしまふだろう。力もないのに機会が与えられるのも、目に見える力以外のものに託してもらえらるのも、今だけだ。速さじゃなくて強さでもない。今、俺は俺だから走つてる。

「ジロー、がんばれ！」

「あと1キロだよ！」

「ジロー、ファイト。ここからここから」

広い道に出ると、沿道には応援をする人があふれていた。俺にもいろんな声が届く。クラスメートの声、バスケット部の後輩の声、仲のいいやつらのおばちゃんやおじちゃんの声まで聞こえてくる。

渡部が言つたとおり、¹⁴俺は何一つ損なんかしてない。いつもの調子で引き受けたからこそ、今ここにいられるのだ。俺は身体に神経を向けて、自分の残っている力を確認した。いける。ここから残り1キロ弱。ペースを上げて走りきれる。俺は前を走る集団を見すえて、腕を大きく振つた。

息を切らしながら走っているうちに、中継所が近づき渡部の姿が見えた。唯一俺が苦手とするやつで、唯一俺を心配してくれるやつ。今はどうだろう。走れもしないくせに引き受けてと、やきもきしながら見ているだろうか。いや、そんなことはない。俺が俺らしくやりさえすれば、渡部は認めてくれるはずだ。

「ジロー。いいぞ、そのままそのまま。ここまで」渡部は手を振りながら、叫んでいる。早くあの手に襷を渡さなくては。俺は集団の中に突っこむのも気にせず、一心不乱に渡部をめがけて走つた。

「頼む」「了解」

渡部は手早く襷を受け取つて、すぐさま駆け出した。これでもう大丈夫だ。渡部に襷をつないだたん、俺の身体も心もすつとほぐれていった。

問1 アゝコの漢字の読み方をひらがなで書きなさい。

問2 ①⑩のカタカナの部分の漢字に直しなさい。

問3 a dに次のアゝエをあてはめ、記号で答えなさい。

ア すんなり イ まさか ウ なかなか エ それほど

問4 AゝCの意味として最も適当なものを、それぞれ次のアゝエから選び、記号で答えなさい。

A 「顔をほころばせて」 ア あいさつして イ びつくりして

ウ ほつとして エ につこりして

B 「案の定」 ア 困ったことに イ 思った通りに

ウ 珍しいことに エ いつものように

C 「日常茶飯事」 ア よくあること イ 簡単なこと

ウ 必要なこと エ 気楽なこと

問5 1 「とんでもないもの」とありますが、なぜジローはこのように言っているのですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 大田なら余裕で走れる距離なのに、苦しそうに走ってきたから。

イ いつも悪ぶっている大田が、必死に駅伝に取り組んでいたから。

ウ 大田の順位がジローの予想よりずっと上だったから。

エ 他人に頼らない大田がジローに頼みごとをしたから。

問6 2 「唯一苦手とする」とありますが、ジローが渡部を「苦手とする」理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 自分が渡部より全ての面で劣っているような気がするから。

イ 渡部は自分と違い、男子にも女子にも信頼されているから。

ウ 渡部はいつも攻撃的な言葉でみんなを傷つけるから。

エ 渡部はあれこれ文句を言い、自分を不愉快にさせるから。

問7 3 「みんなから非難の声があがった」とありますが、その理由として適当なものを次から二つ選び、記号で答えなさい。

ア みんなの気づかいを無視して、ジローを馬鹿にしたから。

イ わざわざ自分の歌のうまさを自慢する発言をしたから。

ウ 一度決まったことに反対し、話し合いの時間を長引かせたから。

エ 自分も音楽がわからないのにジローに才能がないと言ったから。

問8 4 「身体がぎゅんと引き締まる」とありますが、この時のジローの気持ちとして適当なものを次から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 緊張感 イ 恐怖感 ウ 高揚感 エ 達成感 オ 悲壮感

問9 5 「何かが沸騰しはじめた」とは、ジローのどのような気持ちを表現したのですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 大田をひきもどそうとする焦り。

イ 明日の自分の走りに対する不安。

ウ 選手を引き受けたことへの後悔。

エ 走らないという大田に対する怒り。

問10 6 「冷えた空気」とありますが、ジローは周りのどのような様子から「冷えた空気」を感じとったのですか。解答らんに合うように、十五字以上二十字以内で答えなさい。

問11 7 「誰も視線を合わせることもしない」とありますが、その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 渡部の意見に素直に賛成してよいものなのか決めかね、動揺しているから。

イ それまでのチームの和が乱れてしまい、それぞれが全く違うことを考えているから。

ウ 自分たちを馬鹿にする渡部への怒りから、何も口に出せなくなっってしまったから。

エ 渡部に反対ではあるが、反論したところで勝てないことを誰もが知っていたから。

問12 8 「表面を滑っていくだけだった」とありますが、この表現をわかりやすく言いかえたものとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア わかりきったことだった。

イ がっかりさせるだけだった。

ウ 何の意味もないものだった。

エ 逆効果になるだけだった。

問13 9 「俺らの目を見て」とありますが、この時の設楽の気持ちとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 共感 イ ためらい ウ 怒り エ 確信

問14 10 「俺さ、ジロー見てるといらいらするんだ」とありますが、渡部が「いらいらする」理由を三十字以上四十字以内で答えなさい。

問15 11 「今まで自分を包んでいたものを捨てきて来る」とありますが、

① 「今まで自分を包んでいたもの」と同じ内容のたとえを本文二枚目から十五字以内でぬき出して答えなさい。

② 「自分を包んでいたものを捨てきて来」たことがわかる大田の行動を、十五字以内で答えなさい。

問16 12 「この駅伝の持つ意味」とありますが、大田にとって「この駅伝」はどのような意味を持つとジローは考えているのですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 自分の実力を周りに示せるチャンスで、ヤンキーという悪い評判を変えられるもの。

イ 自分のよりどころとして、中学生らしく真剣に取り組めるただ一つのこと。

ウ 大田が初めて自分の意志で決めたことで、家族にいいところを見せるチャンス。

エ みんなに頼りにされるただ一つのものであり、高校進学の手になるもの。

問17 本文中のには次の五つの会話文が入ります。正しく並べかえて記号で答えなさい。

ア 「すぐに俺に頼むなんて、そんなに断られるのが嫌だったのか？」

イ 「じゃあ、何だ？」

ウ 「まあ、ジローなら簡単に引き受けてくれるだろうって期待したのは確かだけど、だからってジローに頼んだわけじゃないよ」

エ 「ジローならやつてくれるだろうと思ったし」

オ 「どうして俺なの？ たいして走るの速くないのに」

問18 13 「榊井の言いたいことはわかった」とありますが、榊井の考えをジローはどのように理解したのですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 走者としてのジローの能力は非常に安定しており、部長としてそれを評価しているということ。

イ バスケ部で活躍していたジローなら、チームのまとめ役ができると期待したということ。

ウ 走者としての能力だけではなく、ジローの明るさや楽しさがチームに必要なということ。

エ 本当は数合わせのために誘ったのがわからないように、適当にごまかそうとしているということ。

問19 14 「俺は何一つ損なんかしていない」とありますが、その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 負けるくやしさを知り、勝つために努力することの大切さを学んだから。

イ 自分の知らない能力を引き出す機会が得られ、みんなに応援してもらえるから。

ウ 力がなくても機会が与えられることで、中学生としての自覚が生まれるから。

エ 自分の限界に挑戦することで、スポーツ選手としての能力を引き上げられたから。

様子。

カ		ア	
機		凝	
嫌		らして	らして
キ		イ	
障		形	
る	る	相	
ク		ウ	
面		痛	
倒		い	い
ケ		エ	
懸		奮	
命		わせた	わせた
コ		オ	
的		先	
確		輩	

⑥		①	
	ハラ		イッ シヨ
⑦		②	
	キンク		ハ ナ ミ ス
⑧		③	
いた	オドロ いた		トク テン
⑨		④	
	ヨク アサ		ハク シ ユ
⑩		⑤	
きたく	ナ きたく	しい	ホ しい

a
b
c
d

問 4

A
B
C

問 6

問 9

[illegible]

問 12

[illegible]

①

②

問 17

↓

↓

↓

↓

問 19

受験番号